
この時間（とき）がずっと続きますように.....

和藤渚

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この時間がずっと続きますように……

【ノーノード】

N19118E

【作者名】

和藤渚

【あらすじ】

これはべた恋企画の第一回出会いをテーマにした作品です不良少年といじめられっ子のお話

その日いつものように登校する私。

そのたびに突き刺さる鋭い視線。

「またきたよ」

「あいつ、まだこりてないみたいね」と小声でヒソヒソ話す周りの人たち。そんなのも気にせず自分の席に向かう。

そして机には余白がないほどびっしり書かれた落書き。その中に際立つて大きく書かれた“死ね”という文字

死ね

死ね

死ね

死ね

死ね

死ね

死ね

死ね

それを見た瞬間私は決意した。

死のう……

私は密かにしつかりとした決意を持ちながら授業を受ける。

一方

俺はケンカに明け暮れていた。もちろん好きでしているわけではない。

「お前らもこりずにキタネエーな!! いつもいつも」

「つるせー」

「少しば、まともなやつ連れてきたのかよ?」

「ふん、今のうちだぜ。余裕コイタこと言えんのは。やつちまえ!!」

と50人程のガラの悪いバカたちが向かってきた。

「あ～もつづぜえ～やつらだな～」

瞬殺で終る。

「大丈夫か？　たくつお前もお前だぜ。なんでいつも捕まるんだよ？　逆に尊敬に値するぜ」

「そうですか？」

と誇らしげに言う人質。

「褒めてない、褒めてない」

毎回捕まるバカがいるからだ。

そのため学校始まって以来の問題児と言われるで「ゴミ扱い」。

「日本全国のゾクを統率している」

とか

「200人以上のヤーさんを一撃で全員KOさせた」

とか

「目を合わせただけで殺される」

とか変な武勇伝ハッタリをつかまされている。

授業に出れば出たでまるで触らぬ神にたたりなしと言つたように、余計な刺激を与えないようにと異様な緊張感に包まれる。

その日も俺は屋上でフケていた。

とか

「もうこんな時間が」

空は西田が射していた。

どうやら和馬はいつの間にか眠つていたようだ。
(あれ?)

と田を何度もこすり、凝らしてみてみる。

するとフェンス越しに立つてている女の子の後姿。寝ぼけているのかと自分を疑つた。

「おい！テメえー何してんだ？」

「……」「

女の子は一瞬びっくりしたような表情で振り向くが冷静に
「私、これから死ぬのよ？ 飛び降りて死んでとてもいい世界に行
くの。」

と淡々と語る女の子。

(こいつなにいってんだ？ バカだろ！)

と和馬はさほど本気にしていなかつたので

「そつか。とてもいい世界にいくのか。そりや良かつたな。じゃあ
俺帰るから。

警備員がかぎかける前にさっさと帰るんだぞ？」

と彼女に背を向けた。

「じゃあね」

と彼女は挨拶したので挨拶を返そつと振り返ると

彼女は飛び降りた

(嘘だろ！――！)

和馬はとっさにカバンを投げ捨てフェンスを飛び越え、飛び降りた。
そして彼女をかばう様に抱きしめた。

幸いにも大木がクッショントなりかすり傷程度で済んだ

「いつて――大丈夫か？ たくつホントに飛び降りる奴がいるか
よ」

呆れ顔な和馬。

内股ですわり両手を突きつつむく女の子。

女の子から涙が零れた。

「おい――どこか痛いのか？」

「……ううん。大丈夫。私に関わらない方がいいわよ？」

と彼女は小さく返事をし、警告した。

「ああ……」

ドスツ！！

と和馬は屋上から見下ろす。すると女の子たちを見つけた

「あ！ 昨日のやつだ。なんだ？ あれ」

真紀は放課後の校舎の裏の壁に打ち付けられ反動で座り込む。真紀のクラスほぼ全員が集結していた。

「昨日飛び降り自殺したんだって？」

と主犯格の女が仁王立ちで腕組んで見下した。

「マジかよ！ でなんで生きてんだよ？」

と驚く男子。

「誰かが助けたらしいのよ？」

「なんでもそれが一条和馬らしいのよ」

「ウソだろ！？！」

「何？ 一條和馬にボディーガードでも頼むつもり？」

「……」

黙り込む真紀。

「黙つてちや分からないでしょ……」

顔をおもいつきり蹴つた主犯格。

「うつ」

真紀は顔を歪め前のめりになる。

「その身体からだと引き換えにボディーガードを頼んだんでしょう？」

また主犯格が蹴つた。

「ねえそなうなんでしょ！ この変態が……」

と踏みつけられる。

「違う！ そんなこと……誰か助けて……」

「つるわい！ しゃべるな！ 菌がうつるー。あんたみたいな『ノミ』を助けるやつなんているわけないじゃない。あんたは生きているだけで地球を汚染してるのよ！ わかつてんのーー？」

胸倉をつかまれ突き放された。そして壁にぶつかる。

「『ノミ』でもちやんと使ってあげないとね？」

ボロボロになつている女の子にそう話しかける。

「男子たち？ こいつを有効活用してやんな？」

とズボンのチャックをみんな下におろしてどんどん近づいてくる。するといきなり男子の何人かが吹っ飛んだ。

「一条和馬！――」

「貴様！―― どちらわいでた！――」

驚くクラスメートたち。

そして主犯格の女にゅつくりと近づく。ものすごい威圧感。いやその言葉だけでは到底かないそういうにない感覚。

「な、何よ！――」

今にも主犯格の女はおじけ付きそうだが、それを阻止しようと必死に気を張っている。

和馬は主犯格の女に前立つと容赦なく右ストレートを食らわせ、3mほど吹っ飛ばした。

主犯格の女は壁に打ち付けられその反動で座り込む。「ふん。最低な奴だとは思つてたけど容赦なく女に手を出すなんて本当に最低ね」

と主犯格の女は手で口を拭きそつづぶやく。

「どつちが最低なんだよ？ 女に容赦なく手を出す俺とクラス全員で集団レイプを煽つてるその女。やーどつちだ！――？」

そう言つていくうちに他の奴らはどんどん逃げていく。

「オレしらねーぞ」

「私辞める」

そして主犯格の女一人になつた。

「覚えてなさい」

と主犯格の女は逃げて行つた。

「大丈夫か？ ボロボロじゃねえか」

「なんで来たのよ？」

「屋上から見えたからなにかなとおもつてな」

二人はとりあえず保健室へ行き応急処置をして帰つた。

そのときもつ大丈夫だからと言つが明らかに無理をしてるのが見え見えな態度な女の子。

「バーカ。あんなことされて『はい、やりますか』って言つて帰れるわけねえんだろ」

といふことでその女の子を送つて帰ることにした和馬。

「お前名前は？」

「二ノ宮真紀です。あなたは？」

「一条和馬」

サバサバとした会話。

しばらく沈黙が続く。

横断歩道の信号が青信号が点滅し、急いで渡つている人たちの中一人立ち止まる女の子

ブッブー

車が発進し、クラクションが鳴り響き迫つてきているのだが、彼女は一步も動かない。

「おい！！！ 早くしろー！」

と呼びかけても動こうともしない。

和馬はその中に飛び込み彼女を抱きかかえ横断した。
彼女は涙を零して

「なんで……なんで死なせてくれなかつたのよ……！」
と叫ぶ真紀。

「バカか！！！ お前は……！」

「ここには私の居場所がないの……」
ついに泣き出す。

このまま家に帰えせば本当に自殺しかないと考えた和馬はこり近いともあって自分の家に招くことにした。

和馬の両親は海外で働いているため現在一人暮らし。
もちろん女の子を自宅に招きいれるのは初めてだ。
普通こういうときは緊張するモノである。
しかし彼女の場合、別の緊張である。

まづ玄関で傷つけられそつた物を探す。

(無いな)

「とりあえず、入れよ」

と平常心を保とうとする和馬。

「あ……はい。お邪魔します」

「ちょっと待つてろ」

と居間を片付けていた。

すると真紀が入ってきた。

そこには足の踏み場が無いほど散らかった部屋があった。

(汚い……)

と思つた真紀はスイッチが入つた

「一条君！燃えるごみと燃えないごみ、ペットボトルちゃんと分別しないと…それにインスタントばっかり体壊しますよ。服散乱してるじゃないですか！…どれが洗濯物かもわからない」

とまるで親が子供に説教するように饒舌になつた真紀は手際よく片付けた。

「ふー」

と汗をぬぐう真紀。

ドキッとする和馬。

すると真紀は我に返つた。

「あ！　すいません…！　すいません…！　すいません…！　ついスイッチが入つてしまつて…！」

「気にするなつて。部屋もきれいになつたんだし」

(問題……ねえーな。)

と安心した和馬は

「なんか食うか？」

「私、作ります」

「いってあんたは客なんだからわざくじしなつて」

「いえいえわざわざ家まで入れてもうつて悪いから」

「ならお願ひすつかな？」

台所の包丁が目に入る

「いや、俺がやる」

「でも……」

「でもじゃない……」

と睨みつける。すると彼女の顔は曇った。

「すいません」

(言い過ぎたか?)

「お前は密だ。だからこじりじりとしてる」

久しぶりに台所で作業をする。

まず溜まった食器の山を片付け、冷蔵庫に入ってる使えそうな食材

を適当に取り出し

料理を始める。

完成し部屋にもって行く

彼女を見ると本を読んでいた。

「おい? それなんだ?」

「インジヨン・ライディーの紙ひきです。」

紙ひきについてこいつのは心を閉ざした少女に毎日書いた手紙を紙ひきにして彼女の部屋に飛ばしてこいつのひきこみ恋愛マンガである。

それを聞いた時和馬は目が点になつた。

「おまえ……おもしれーか? それ

「はー」

と真紀はニコッと笑う。

「この人の作品好きなんですね。何と言つても青春を返せですよ

ね」

青春を返せっていうのはある日高校生が殺されあの世にいくがひょんなことから生き返り

それからというもの毎日奇妙なことばかり起きるノーメディーでその人の初連載の作品である。

「それより飯にするぞ? もう俺は腹減つて死にそうでな

「そうですか」

と彼は食事を取り始めた。

「どうだ?」

「おこしいです」

「そうか」

「こんなにうまく料理できるのになんでしないですか? もつたい

ない」

「当たり前だろ? メンデクセーんだよ」

「でもじすいした方が食費やすくなりますよ」

「うるせーもっさ食べろ」

「で? なんでそんなに死にたがるんだよ?」

「言つたでしょ? ロロには居場所がないって

「どうじうことじだよ?」

「なんであなたにいわなくちゃ いけないんですか?」

「言いたくねえ~なら別にいいけどよ。まあ俺も同じようなもんだからな。好きでケンカしてるわけじゃねえのによ。みんなから疎ましく思われてよ? いつの間にか変な武勇伝流されるしよ? ハッタリ

「どんなのですか?」

「200人のヤーさんを一瞬で倒したとかよ?」

「そりなんですか?」「

「なもんできるわけねえ~だろ! だいたいそんなことしたら俺が一瞬にして死んじまつ。たく酷いよな? どこつもここつも」

「フフフ……」

「笑うなよ」

「すいません」

「ただこれだけは言つておく。人間誰だつてイヤな事ある。時には死にたくなる時も。でも死んでしまつたらその時点で自分に負けるつてことになるんだぞ? 自分に勝てるようになれ。今は無理かもしかねえ~けど。俺でよければいつでも相談にのつてやるからよ。それに……」

(自分に勝てるよつに)

「それに？」

「それにもし死んで助けた俺が呪われたんじゃたまつもんじゃないからな」

「それってどういう意味ですか！……！」

「その顔だよ、その顔。さつきよりいいぞ。だつてさつきはこんな顔してたんだぜ？」

と和馬はまるで怨念こもった幽霊ような顔をする

「してません！……！」

「してた！……！」

「してません！……！」

言い合いをしているうちになぜかだんだん2人は笑いが込み上げてきた

「ふつハハハハハ」

「ハハハハハハハ」

2人はバカみたいに笑った。

（なんでだろう？ この人いるとホッとする。それに私こんなに笑えたつけ？）

（こんなに笑ったのつていつぶりだ？ こいつといふるとなんか楽しい。会つて2日しかたつてないのに不思議だな……こんな気持ち）

二人はこう思った

この時間がずっと続きますように……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1918e/>

この時間（とき）がずっと続きますように.....

2010年10月20日19時27分発行